

日本ラテンアメリカ学会 会 報

No. 19

1985年8月1日

第19号 目 次

1. 理事会報告
2. 定例研究会
3. 第6回定期大会
4. 学術・文化情報
5. 近着会員業績
6. 事務局から
7. 年報6号募集

1. 理事会報告

○第25回理事会

日時：1985年3月26日(火) 13:00～17:30

場所：上智大学中央図書館。出席理事7名。

○議事録の承認

前回(第24回)理事会議事録のうち、「大会準備委員会」を「大会組織委員会」と修正したうえで承認された。

○報告事項

本会の学術会議への登録が受理された。本会の会員候補は増田前理事長、推薦人は中川理事長である。

○審議事項

i) 理事会の運営

理事長不在に際しては、世間一般的慣行に従い理事の年齢順で理事長代行を決めるものとする。

ii) 財政問題

当面の赤字については各理事からの借入にて補填する。未払い会員に対しては赤字状況を明示して再度督促する。また会費値上げを含めて大会に財政問題を提起する。値上げの際には、学生会費の設置を考慮する。

iii) 新入会員の承認

正会員3名の入会を承認した。

iv) 本年度大会

大会組織委員長水野理事より説明があり、プログラム(案)が検討され、承認された。

○その他の

i) 理事選挙方法に関して、現行では大会欠席者は投票権をもたないこと、2年毎の改選であるため西日本での大会開催に一致するなど問題点があるため、選挙方法の見直しが必要である。これに関して原田理事から後日原案を提出する。

上記に関連して次年度(86年)の大会は今年度に続き、東日本開催を申し合わせた。

ii) 定例研究会西日本部会の事務連絡先を大阪経済法科大学に、東日本部会の連絡先を上智大学にするよう提案があり、承認された。

理事会に引き続き、拡大「年報編集委員会」が開かれた。

2. 定例研究会

○西日本部会第12回定例研究会は、3月2日(土)午後2時から大阪経済法科大学で開催され、以下の2報告が行なわれた。

報告1.

西インド諸島の村落

江口 信清(京都大学)

奴隸制廃止以降解放奴隸によって形成されてきた西インド農民の生活・生産空間としての「むら」が、「西インド」的な特殊性をもつのかどうか、ドミニカ島の事例に基づいて検討される。

ドミニカ島に現存するほとんどの村は、奴隸解放後に形成された。しかし、その基礎は、エスティートの一部ないしは後背地に奴隸が生存作物を生産することが許されていたこともあり、解放前に求められる。解放後、多くの元奴隸が海外移民として出る一方、過半数がエスティートの後背地に生活・生産の空間を見いだし、村がつくられた。村の草分けの多くは、解放前のエスティートでの奴隸間でランクの上位に位置した。一人で土地を購入できない者は集団で土地を入手し、株数によって購入地を得た。

人口760余人、世帯数165(1982年)の規模の調査村は島の東南部の内陸約2マイルの屋根上に位置する。大西洋岸のエステイトの解放奴隸によってつくられ、現在でも村びととエステイトの関係はある程度維持されている。村びとの大多数が、換金用バナナと生存作物の根茎作物の根茎類の生産に従事する零細自営農民である。

村の物理的、社会的境界が存在してきた。村内でも各人の土地の境界はある。村内婚率は高く、新参者は村内の土地を購入することができず、あくまでもよそ者と見なされる。彼らは村出身の配偶者の土地を使う。村内のフォーマルな組織は島全体の下部組織の形をとっている。村びと全員がかつて参加していた活動には、カーニバルや葬儀などがあった。無償の労働交換組織のクドゥメは、近親者や友人間に限られている。村びと間の貧富の差を縮める平準化機構はない。作物泥棒も同じ村びとによって頻繁に起される。村内のものめごとは外部機関の手に委ねられる。土地所有を基盤にした「個人主義」に、すくなくともドミニカ島の村システムの基本的価値である「自由」が表現されているのではないか、と考えられる。

報告2.

1980年代のペルー文学

—バルガス＝ジョサを中心にして—

山藤 孝夫(京都産業大)

1980年代に入てもペルー文学は、マリオ・バルガス＝ジョサを中心に動いている。ホセ・マリア・アルゲダスがインディヘニスモの立場からペルー社会の全体像を描き出そうとしたのに対し、バルガス＝ジョサは都市小説から出発して同様の試みを行なってきた。この2つの潮流は、今日に至るペルー文学において支配的位置を占めている。現在、アルゲダスの文学的遺産を継承する作家は、83年に事故死したマヌエル・スコルサなど極めて少数である。今日のペルー文学は、ブライス＝エチエニケに見られるように、趨勢としては都市出身の作家による都市の読者層を対象としたものになっている。変わったところでは、ノンフィクションやルポルタージュの方法で、ペルーの近現代史を捉え直そうとするギジェルモ・ソンダイクが注目される。

バルガス＝ジョサ自身の文学も、80年代に入って重要な変化を見せており、それまで何らかの形でペルーの現実にこだわり続けた彼も、81年の『世界終末の戦争』では、19世紀末のブラジル奥地に舞台を設定した全く新しい試みに着手している。これはエウクリーデス・ダ・クンニャの『奥地』(1902)の改作という性格を持つ作品である。文学は個人の体験からのみ生まれるとした従来からの姿勢が、ここへ来て大きな転換を遂げている。作品の随所に、冒險小説としての魅力と、叙事詩的壮大さが現われている。特に、後半の共和派とカヌードスの信徒の戦闘場面は、正に映画的な迫力を備えている。手法も伝統的な語りの形式が採用されている。

文学世界のこの広がりをどう解釈するかは意見の分かれるところであろう。しかし少なくとも、ペルー社会の恥部へ向けられた批判精神はその鉢が鈍ってきていることは間違いない。もはやサルトルではなく、カミュに惹かれる作者と、最近の作品の傾向は無縁ではない。

○東日本部会第10回定例研究会は、4月13日(土)午後2時から上智大学で開催され、以下の2報告が行なわれた。

報告1.

ペルー・アンデス南部地域における

インディオの善の回復

木下 康子(筑波大学)

ひとつの社会における、より満足のいく文化をつくりあげるための努力である復興運動は、人類の歴史においてしばしば見られる。

南米のペルー・アンデス南部地域では、16世紀にスペイン人が侵入、植民地状況におかれ以来現在まで、スペイン人以前の伝統的な文化に自己を認識するインディオにより、彼らにとっての満足のいく文化、すなわち善の回復が求められている。

インディオの善の回復は、世界観の中に位置づけられる。それはクティの多くの事例を見ることにより明確に理解される。クティはひとつの契機を通して善が戻ることである。インディオにとって善とは、人間を取りまく全ての自然との互恵的な関係にもとづき、そこから生を受けて生きることであり、それは世界の秩序にかなったことである。インディ

オはこの善の回復を、善でないことを受け入れつつ、待ち求めている。

インディオは、善の回復を行ふ行為においてもこれまで示してきた。その手段は、今世紀にはいり、それまでの千年王国的な性格から、社会運動へと変化した。そしてその焦点は、インディオを取りまく自然界の中で最もその基盤をなす「土地(大地母神パチャママ)」の回復である。

行為における善の回復の性格は、時代により変化し、インディオ自身をも変化させてきた。今後も変化はつづくであろうし、善の意味するところも変わりうる。しかし、インディオは今後も善の回復を求めつづけるであろう。彼らの善の回復は、世界観におけるクティに裏づけられるからである。この点で、インディオの善の回復は、他の地域の復興運動のように、近代的社会運動、革命運動に容易には吸収されまい。クティは、現在の善でない状態を受け入れつつ、善の回復を求めていく。未来は現在のクティとも言える。

報告2.

ペルーの政治変化と民主化

遼野井茂雄（アジア経済研究所）

ペルーの政治社会は、過去四半世紀の間にきわめて変動著しい様相を呈してきた。1970年代の上からの諸改革の時期を経て、過去の閉鎖的な政治体制は徐々に開かれつつある。また農村人口の大量流入による都市の急成長という50年代以降の趨勢的傾向は、ペルーにおける都市社会優位の構造を確立せしめるに至った。しかし、このなかで政治の大衆化状況が進行し、都市下層大衆(pueblo)の社会的台頭が目に見えて進みつつある時、国家行政は拡大したにもかかわらず、時代錯誤的でそれに十分対応できないまま、社会諸部門の活発な活動から脅威を受けつつある。

報告では、現代ペルーがいかに急速な政治社会変動を経験しつつあるのかをみた。まず、ペルーの政治社会に固有の特色を剔出し、それが軍政12年間(docenio militar, 1968-80年)にどのように変化をとげ(あるいは維持されたか)を検討した。次に、この70年代の変化とともに著しい都市化によって現出した「政治の大衆化」状況について考察した。

3. 第6回定期大会

第6回定期大会は6月8日(土)、9日(日)の2日間にわたり、東京の上智大学で開催された。初日は午前中に研究報告、午後は総会に続き以下の2つの記念講演が行なわれた。

i) 新大陸『発見』500年記念を

迎えるに当って

林屋 永吉氏（前駐スペイン大使）

ii) Japón y Latinoamérica: La dialéctica entre lo nativo y lo foráneo como clave de su historia y su cultura

Rafael Campo氏

(コロンビア、ハベリアナ大学)

2日目は午前中2会場に分かれて研究報告、午後は「1980年代ラテンアメリカの民主化」の題でシンポジウムが行なわれた。

○総 会

会員総数269名中、総会出席者51名、委任状提出者53名、合計104名により本総会は成立。議長に山崎春成会員が選出された。

i) 事業報告

中川理事長より84年度事業報告があり、承認された。『年報』について松下理事より補足説明があり、投稿の呼びかけがなされた。

ii) 決算報告

中川理事長より決算報告があり、次いで三谷監事より会計監査報告があった。印刷費、会議費、人件費が低く抑えられており、学会活動が不活発にならない配慮が必要であるとの指摘がなされた。決算報告、監査報告とも、総会で承認された。

iii) 60年度予算案・事業計画

中川理事長より60年度予算案について説明があり、山田会員より会費に関して、滞納金の徴収を考慮すべきであるという提案や、石井(陽一)会員より『年報』のコストダウンを図って予算に見合ったものにすべきであるという提案があったのち、承認された。第7回定期大会を東京外国语大学にて開催することが提案され、承認された。

iv) そ の 他

(1) 会費の値上げ

中川理事長より61年度からの会費値上げが提案された。人件費がボランティアによ

って低く抑えられていること、および『年報』『会報』の発行維持のためという提案理由が示された。清水会員より、会員の拡大、研究会の活性化を検討したうえで、会費値上げを提案すべきであるとの指摘があった。正会員7000円(ただし大学院に在籍するものは5000円)、準会員は25ドルとし、61年度から実施することが承認された。

(2) 理事選挙規則の改正について

原田理事より提案理由の説明があった。現行の直接選挙制度では、委任状提出者が投票放棄者とみなされており、会員の意向が反映しにくい。そこで直接選挙制に不在者投票を加味してはどうかという提案がなされ、会員から広く意見、批判を徴すこととし、来年度総会において検討することが合意された。

(3) 学術会議会員選挙について

中川理事長から、学術会議の会員推薦選挙について経過説明がなされた。

○記念講演

1. 新大陸『発見』500年記念を

迎えるに当って

林屋 永吉(前駐スペイン大使、
上智大学客員教授)

1992年はコロンブスが新大陸を「発見」してから500年目に当るが、これを記念して世界各地で種々の行事が催されることになろう。特に旧宗主国スペインは本年、念願のE C加盟が確実となり、中南米と欧州のかけ橋となることを目指して「500年祭」の実施に力を入れており、すでに「アメリカ大陸発見全国委員会」(Comisión Nacional de Descubrimiento de América)を発足させた。

これに対して、中南米の1国(メキシコ)から反対の声が上っている。発見(descubrimiento)とは知らざる土地を見付けることであり、新大陸の場合は原住民社会に対するスペイン人の侵入(invasión)であり、破壊(destrucción)であった。これを記念することはまだしも、祝うというのはもっての外だというわけである。こうしたメキシコの態度に対して、原住民人口が多いグアテマラ、パラグアイ、ボリビアなどの国々も同調する動きを見せている。

ところが皮肉なことに、過去に行われた唯一の100年祭である「400年祭」(1892年)を

最も盛大に祝ったのは、他ならぬメキシコであった。当時、メキシコはディアス(Porfirio Díaz)の独裁政権下にあったが、ディアスは「鹿鳴館」まがいの欧化思想にかぶれ、メスティーソ、インディオをけがらわしいものと蔑む一方、コロンブスを称賛し、独立記念日以上に盛大にこれを祝ったのである。

私としては、españolismoにもindigenismoにもとらわれない「500年祭」を行うべきだと考える。そして日本でも、21世紀に向かっての日本・中南米関係改善のための好機として「500年祭」を開催すべきであると思う。

2. Japón y Latinoamérica: La dialéctica entre lo nativo y lo foráneo como clave de su historia y su cultura

(日本とラテンアメリカ——その歴史と文化のカギとしての「土着」と「外来」の弁証法)

Rafael Campo(コロンビア、ハベリアナ大学教授)

近代の社会科学の発展は、異文化間の比較がいかに重要であるかを示している。19世紀に欧州の社会科学が危機に直面したとき、その打開方法として検討されたのはアジア、ポリネシア、アフリカ、ラテンアメリカなど欧州以外の地域に関する研究であった。

ラ米の社会科学は第2次世界大戦後、欧米で発展した理論をもとに、従属論やラ米発展論などの成果をあげてきたが、近年、新たなalternativeとして非欧米世界唯一の工業国である日本に注目するようになった。私は「土着」と「外来」の視点から、日本とラ米の歴史の比較を行ってきたが、その結果、外来文化との接触において日本は4つ、ラ米は3つの重要な時期を経験していることが明らかとなった。注目されるのは、日本ではいずれの時期も、外国の文化を大量に取り入れながらも独自の文化的統一性を保持するという対応を示したことである。

現代の世界は政治・経済力の多極化、東西間紛争の周辺諸国への波及という新たな状況を呈しているが、ラ米の対応は①国内政治の民主化と大衆参加、②地域協力による問題解決、③世界への政治的、文化的開放——の3点にかかっている。

(文責:水野 一)

○研究報告

1. メキシコ農業政策の

最近の傾向と“生産の協同”

石井 章（アジア経済研究所）

革命後メキシコの農業政策は2つの路線の間を揺れ動いてきた。農地改革路線＝「農地政策」(política agraria)と農業近代化路線＝狭義の「農業政策」(política agrícola)である。1940年以後は概して後者の路線に沿った政策がとられ、農業生産は伸び、農業部門は国の経済発展にとって一定の貢献をしたが、一方では近代化に伴い農業部門内部での矛盾が深まり、先進的農業と後進的農業との間の較差、二重構造が顕著となった。これに加えて65年以後農業生産は停滞し、最近では基本的な食糧の生産不足、輸入依存が大きな問題となり、農業危機が叫ばれている。

こうした事態を前にして従来の農業政策の再検討、なんらかの手直しを迫られるにいたった。「メキシコ食糧計画」(Sistema Alimentario Mexicano, SAM)は農業危機への対応策の一つとして打ち出されたものである。従来の農業開発戦略が主として先進的な農業地域とくに灌漑地を中心にたてられたのに対して、SAMでは天水農地における生産の向上を重点戦略の一つにしている。SAMのもう一つの特徴として、土地所有形態の異なる生産者の間での「生産の協同」の構想がある。これは「農牧業振興法」(Ley de Fomento Agropecuario, LFA)で具体的に示される。すなわち「共同的土地所有」(エヒード)と私的所有(私的農場経営者)が契約に基づいて「生産単位」(unidad de producción)を形成し生産の場で協同するというもので、革命、農地改革後の農業経営形態としては画期的なものであるが、農地改革の基本理念に大きな修正を加えるものだけにその評価は分かれれる。

報告者はシナロア州クリアカン地方の調査事例をもとに、エヒードと「生産単位」の実態を示しつつ「生産の協同」に対する評価を試みた。

2. 西インド諸島農民の世界観

—ドミニカ島農民の事例—

江口 信清（京都大学大学院）

カリブ海地域諸社会の農民の大半は、アフ

リカからの奴隸の子孫であり、19世紀の奴隸制廃止以降本格的に彼らの社会を形成してきた。彼らの日常の世界（生活・生産）の諸側面は、奴隸以前のアフリカにおける民族文化、カリブ海地域での奴隸の時期と解放後の過程での非アフリカ的文化要素との接触・混淆、そしてなによりも彼らのおかれた自然環境との相互作用を通じて形成してきた。彼らの世界観は上述のような状況のもとに形づくられた。世界観が人びとの行動と自然との係わり合いを「わかりやすく、実体的な筋の通ったものにし、それについて思い、感じることができるようにする」ものであれば、世界観の分析はいくつかの点で意義が見出せる。なによりも、カリブ海地域の農民社会の奴隸制を背景にした特殊性と同時に、農民社会の持つ普遍性の考察に大きく貢献するだろう。

本報告は小アンチル諸島の一つ、ドミニカ島の農民の間で1982年～1983年に行なわれた報告者による人類学的フィールドワークで収集された諸事例に基づいて、彼らの世界観とはどういったものか、そしてそれが彼らの社会システム及び自然とどのような関係を持つのかといった点にとくに強調点がおかれる。

3. 祖先神の冬の旅 — 現代ツォツィル

語圏の口承文学と『ボボル・ヴフ』

における村落・民族創建説話の比較 —

落合 一泰（中部大学）

ある民族集団が物語る歴史は、しばしば自民族創建の叙述に最も大きな比重を置く。その場合、創建者が放浪の旅に出、試練を経て祖先と呼ばれるにふさわしい人物・神に成長し、定住地を見出して民族発展の礎を築くという説話パターンが世界各地に見られることは、フォークロア研究者たちにより指摘されている。

本報告の目的は、16世紀にローマ字化されたグアテマラ高地キչेー王国の神話的・歴史的伝承記録『ボボル・ヴフ』が物語る王国発展に先立つキչेー祖先神の放浪神話、およびメキシコ南部チアパス高地のツォツィル語圏にて発表者が採集した村落形成をめぐる口頭伝承の比較分析にある。

時間的に4世紀半、空間的には直線にして250km隔たったキչेー王国と現代ツォツィル語圏の民族・村落創建神話には、主人公で

ある祖先神・村落守護聖人の高地一低地間の放浪の足跡のシンタグムにおいて、顕著な共通性が見られる。これは、キչェー祖先神に類似した土着的神格が先スペイン期のツォツィル地方にも存在し、それが植民地時代以降キリスト教の聖人などと一致するよう再解釈された結果であろう。同時に、先スペイン期から今日に至るまで、マヤ高地社会が常に低地との文化的・政治的・経済的接触を不可欠としてきたことから、ツォツィル語圏の村落創建説話も単なる先スペイン期の神話パターンの残存ではなく、現実の生態学的状況に支えられ、それを反映するものと考えられる。

神話の祖型の探究は本報告の目的ではないが、キչェーおよびツォツィルの創建者放浪神話に見られる共通のパターンは、このような歴史的・生態学的状況を背景としたマヤ高地民の宇宙論に基づく、低地との接触を高地民の文化形成の前提条件とする汎マヤ高地的説話形態ではないかと発表者は考えている。

4. ピシュタコと村落—ペルーの事例から—

加藤 隆浩（イペロアメリカ大学大学院）

アンデス農民が生活の場を如何に把握しているかを検討することは、生業の中心たる農民が当該地域で無視できない数に上ばる現状を考慮すれば、それに関連する社会科学の諸分野にとって重要な作業の一つになると思われる。そこでこの報告の主眼は、アンデスの農民の生活としばしば密接に結びつくピシュタコ(pishtaco)の分析を通して、人々が担う村落のイメージの一部を抽出することにある。

中央ペルーには、他のアンデス地方ではナカク(Nakaq)、カリシリ(Carisiri)等と呼び称されるものに対応するピシュタコという存在が知られている。それは、夜間に村人を襲撃・断首し、人体の脂肪を抽取して、それを重機・汽車の燃料・鐘の鋳造に不可欠な油として売り飛ばす、という血生臭い「殺人鬼」である。それは、説話の世界でも語られはするが、非現実的な要素を多く含むにもかかわらず、インディヘナはその存在を現実の世界にも見い出せる、という。

事実、村落には、しばしば他の村人からピシュタコと目される人物が住む。概して、その嫌疑を受ける者は財産家であり、それゆえ他の村人から孤立する場合も多い。したがっ

て、ピシュタコはその個人に注目すれば、その経済的優位性にもかかわらず、一般からの羨望を受けて「殺人鬼」の名のもとに社会・道徳的地位を下げられてしまう。その意味では、この観念は社会を平均化する役割を果たすといえる。

ところで、村人によれば、一人のピシュタコが死んでも立ち所に別のピシュタコが出現する、という。そこで「殺人鬼」がこのように次々に再生産され、それが事実上の不滅性を獲得すると思考する村落の事情に注意を払えば、村人が村落を決して静的には捉えておらず、むしろ社会内の平均化が必要な程、上下の変動があると把握していることになろう。そして、村人がその変動によって生ずる上下の較差に関して否定的見解を持つのは言うまでもない。

5. アンデスの気候変化

野上 道男（都立大学）

アルチプラノ(亜熱帯高圧帯の乾燥地域)およびチリ中南部(偏西風帯の降雨地域)における氷河および内陸湖の地形調査結果に基づき、アンデス地域における第四紀以来の気候変化の概要について述べる。

次にアンデス山脈全域にわたって、現在の氷河の雪線高度分布図を作り、また氷河地形から氷期の氷河の雪線高度分布図を作成する。現在の気候と現在の雪線高度分布の対応関係をもとに、氷期の雪線高度分布図から、氷期の気候の分布を推定する。おもな結果は次のとおり。

- 1) ラパスの谷(ボリビア)で、327万年前という測定値を持つ火碎流堆積物に覆われる氷河性堆積物が発見されている。このことからアンデス山脈は327万年前には、ほぼ現在程度の標高に達するまで隆起しており、現在判明しているところでは最古の氷河作用を受けた。その後、アルチプラノでは地層のみから判別できるものとして5回、地形および地層から判別できるものとして3回、合計8回の氷期の繰り返しが識別される。
- 2) アルチプラノおよびチリ中南部においては、最終氷期の氷河最拡大(5-6万年前)以後、おそらく2万年頃に小規模な、しかし明瞭な氷河の拡大があった。1.3万年前

頃、アルチプラノの内陸湖も氷河も急激な縮小が始まった。そして、2000年も経ないうちに、氷河も湖も現在程度の規模まで縮小した。その後の氷河の明瞭な前進は16世紀頃から始まつたといわゆる小氷期のものである。

- 3) 雪線高度の分布から、氷期の気候の分布を推定・復元した。氷期にはアンデス全域について、雪線は平均して1000m程度低下していたが(気温換算で5-6度C)、緯度にして3度(距離で約300Km)を越えるような気候帯の水平移動は認められない。

6. ボリビア・アマゾン・エセエハ族の神話

— 火の起源神話をめぐって —

木村 秀雄(亜細亜大学)

エセエハはボリビア北西部からペルー西南部にまたがって住み、ペルーではワラヨ、ボリビアではチャマと呼び慣らわされている原住民集団である。報告者は1979年から1981年にかけて合計約1年間ボリビア・エセエハの村落において民族学調査を行なった。本報告はその調査報告の一部である。

エセエハはかなり社会文化変容が進んだ集団であり、儀礼などは殆ど姿を消してしまっている。しかし、固有の言語エセエハ語は失われておらず、エセエハ語による口頭伝承は、日常的に語られる機会こそあまりないものの、未だに数多く記憶されており、調査期間中に異伝をふくめると200話以上を採録・翻訳することが出来た。

本報告でまず取り上げるのは、シカとコンドルにまつわる伝承である。この話自体は直接には、「火」や「結婚」のテーマを扱っているわけではないが、南アメリカの他の原住民集団の神話と比較対照することによって、トゥピ諸族における「火の起源」の神話やギアナにおける「コンドルとの結婚」の神話と同じ構成を持っていることが明らかとなる。

次に「火の持ち主であるカエル」や「アナコンダとの結婚」の神話の分析に進む。そこにおいては、エセエハの世界観における火の意味の二面性や、天・地・川の対立が明らかにされる。

次に、エセエハの象徴世界における自然界と人間界との対立関係がいかに表現されているかという問題に分析を進める。エセエハの

世界観においてはシカはしばしば動物主と同一視され、人間界に対する動物界の代表とされることがある。最後には、自然の代表者エドシキアナと人間の代表者エヤミケクア(呪術者)との関係が日常の社会関係においてどのように表現されているかという点の検討をもって報告をしめくくる。

7. ブラジル史における都市、

農村、フロンティア

山田 隆男(筑波大学)

フロンティアという言葉には、1) 国境、国境地方、と2) 辺境ないし開拓前線、つまり開拓地と未開拓地の間の境界などの意味がある。したがって、ブラジル史において、

- 1) ヨーロッパの海外フロンティアとしての発展、2) ブラジル(植民地)の領域拡大、3) ブラジルの沿岸集落から見たフロンティアとしての内陸への入植、占拠という三つの問題が出てくる。ブラジルの国土が当初のトルデシリヤス条約線を超えて拡大したこと、今世紀初頭にも30万平方キロの土地を購入したこと、反面人口が沿岸部に集中していることは、よく知られている。同国でしばしば用いられる「可動国境」(fronteira movei)という表現も、このような歴史的事実を反映している。

ブラジルは、アメリカ合衆国とならんで、アメリカ大陸の中でフロンティアを神秘化し、特別な価値を与えていた数少ない国一つである。また、イエズス会の教化集落形成の努力に表われているように、領域拡大に使命感がともなっていた、と考えられる。内陸開発の際に、ブラジルでは、カナダと似て、拠点都市の役割が大きかった。

ブラジル人の空間意識には次のような二分法とアナロジーがある：

Casa(家、家庭) : Rua(街路、世間) =
Cidade(都市) : Interior(田舎、内陸部)
ここで、Casa と Cidade に肯定的な評価が、Rua と Interior に否定的な評価が与えられていることに注意すべきであろう。

Interior の一部を構成するフロンティアが正の価値を持つことは、生活圏の末端であるために、負の極限として価値の転換がおきた、と考えられる。

ブラジルの5大地域を、植民地時代の入植

および占拠の要因と関連させれば、次の表ができる：

	農業 牧畜	教化 バンデイラ	集落 商業	鉱業 密輸・牧 畜・軍事
北東部	○			
南東部 1*		○		
南東部 2**			○	
南 部	○		○	
北 部	○			

* 主に、サントスーサン・パウロ枢軸を中心とする地方

** ミナス・ジェライス、リオ・デ・ジャネイロ枢軸を中心とする地方

8. ボリビア東部低地開発と日本人移住地 — 日本人移住地評価への一試論 —

国本 伊代（中央大学）

ボリビア東部低地の大半を占めるサンタクルス州は、わが国の面積に等しい37万㎢と人口86万人(1980)を有する。同州は、1952年に実権を掌握した民族主義的革命運動党(MNR)政権がとり組みその後の歴代政権が受け継いで推進してきた「東部低地開発計画」によって、陸の孤島からボリビア農業の中心地へと急変貌をとげた。この新しいサンタクルス州農業の一翼を担っているのが、同開発計画の下で建設された集団開拓移住地である。過去30年にわたって形成された州内の集団開拓移住地は、今日州農村人口の約47%を擁している。サンタクルス州の五大農作物である砂糖きび、米、とうもろこし、大豆および綿は、いずれも東部低地開発計画の推進に伴って生産が飛躍的に増大し国内消費を満たすに至ったが、これら五大作物の中で、米の81%およびとうもろこしの48%は開拓移住地で生産されている(1980-81)。

このような発展をとげたサンタクルス州の新しい農業地帯に、戦後わが国からボリビアへ集団移住した人々によって建設された2つの日本人移住地が存在している。日本人村とも呼ぶべきこれら2つの日本人移住地は、建設された経緯と経験をそれぞれ異にしているが、サンタクルス州農業の発展と成果の中で、今日高い評価を与えられている。本報告の目的は、この日本人移住地をボリビア東部低地開発計画の枠組の中でとらえ、ボリビアが目指した食糧自給計画の中でどのような役割を

担っているか、また外国人移住地としてどのような存在意義を有しているかを検討することにある。

9. 18世紀ペルーの搾取様式とトゥパック・アマルの反乱 — クスコ司教区を中心に —

真鍋 周三（青山学院大学大学院）

18世紀ペルー副王領では原住民の再生産機構は支配者によって大きく侵害され、破壊された。特に原住民人口の密集した中央アンデス南部高地(シェラ南部)では、様々な搾取への原住民の対応能力はやがて限界に達したことになった。この搾取・収奪のカナメにいたのがコレヒドールである。王権の代行者としての絶対的権限をたてに、無限なまでの強制力を行使したからである。このことが副王領に多くの「不正」を生み、国庫収入の大幅な停滞・低下を招き、植民地行政の機能をも著しく低下させた。そこでスペイン王室は、まず「不正」の排除を手始めとする諸改革によりからねばならなかった。この点がペルーにおけるカルロス3世の改革の特性となつた。

一方、原住民による暴動や反乱・蜂起が領内各地で発生していた。その発生件数は次第に高まってゆき、1780-81年にシェラ南部クスコ司教区ティンタ地方から発生した大反乱によって最高潮に達したのである。これがトゥパック・アマルの反乱である。

本報告では、この反乱の社会・経済的背景のみをとりあげて検討することにする。つまり、18世紀ペルーの搾取機構が原住民の生存状況をいかに損い、また1780年までのカルロス3世の改革がペルー社会にいかなる影響を及ぼしたのかを、クスコ司教区について明らかにしたい。

そこで、問題の構成は次のとおりである。
1. 「18世紀ペルー原住民の搾取機構」では、貢納、ミタ、レパルティミエントが原住民の再生産機構を破壊していく状況を明らかにする。
2. 「カルロス3世の改革」では、「反乱」以前になされた行政区画の改革、自由貿易の開始、増税政策の影響を探る。
3. 「抵抗の発生」では、クスコを中心に流行した「インカ主義」の特質と、1と2の結果生じた抵抗の諸形態を明らかにする。

10. ガルシアニマルケスと 神話的ジャーナリズム

野谷 文昭（津田塾大学）

ガルシアニマルケスとジャーナリズムの関係は、彼の学生時代に始まる。『百年の孤独』の成功によって作家としての地位を確立した後も、キューバのアンゴラ派兵に関するルポルタージュを書くなど、彼はジャーナリストとしてのアイデンティティを失ってはいないようである。

現在刊行中の『ジャーナリズム作品集』は、『ある遭難者の物語』や『貧しかったが幸せだったころ』といった作品が独立した形で刊行されながらも、おそらく資料入手が困難なために研究の対象としにくかった、小説家の分身ともいべきジャーナリスト、ガルシアニマルケスの全貌を明らかにしつつある。

彼のジャーナリズムは、1960年代米国といわゆるニュー・ジャーナリズムとも共通点をもっているが、特に重要な特徴は、ニュース性よりもむしろ物語性に比重が置かれていることである。それは、彼自身認めるように、努めて文学的記事を書くことで、ジャーナリズムを小説の習作発表の場としていたことと無関係ではない。『ある遭難者の物語』はもとより『貧しかったが幸せだったころ』に収録された作品など、多くの作品にその特徴は認められる。わけても注目に値するのは、神話的モチーフや原型的人物のイメージが随所にみられることであり、ここに文学との接点がある。ジャーナリズムの問題としてみれば検閲下における表現方法のひとつと考えることもできるが、しかしそれは戦略というよりもむしろ自発的なものではないか。現実をその背後から描こうとする彼の姿勢は、ジャーナリズムにおいても文学においても共通しているが、文学的ジャーナリズムとは対称的なジャーナリズム的文学『予告された殺人の記録』は、ガルシアニマルケスにおけるジャーナリズムと文学の関係を典型的に示している。

○シンポジウム

「1980年代ラテンアメリカの民主化」

司会 山崎 春成（中部大学）

報告 1.

中米における「民主化」について

加茂 雄三（青山学院大学）

貧困、抑圧、虚偽が長期にわたって累積し、

蔓延してきた中米では、最近の政治の「民主化」の衝撃やその意義もラテンアメリカの他の地域、とりわけ比較的に民主的経験を蓄積してきたアルゼンチンやブラジル等の場合とは大きく異っている。この報告では、最近のこの地域諸国での「民主化」の政治過程を具体的にとりあげるよりも、その場合の言われるところの「民主化」の意味そのものを問い合わせ直すとともに、この地域にとっての眞の民主主義というものについて問題を提起するという形にしたい。今日のこの地域での「民主化」が米国政府のイニシアティブで推進されていることは周知であり、その場合の「民主化」の規準とは、自由な選挙、民主的な政府、人権の尊重であり、その達成度が「民主化」の尺度となっている。しかしこの、いわば絶対化された18世紀の市民民主主義（ブルジョアデモクラシー）は、理念からみても、20世紀の革命の時代の民主主義—私有財産の絶対性を否認し、個人よりも集団の権利を重視する等の一とは適合しないし、実際にも、歴史的にみてこの地域諸国の「民主主義」が殆んどすべてそうであったように、また最近でも1982年のエルサルバドルの制憲議会選舉について実証的に明らかにされているように、抑圧、操作、不正、排除、虚偽、腐敗の実態とならざるを得ない。私が仮りに名づけるところのこの「帝国の民主主義」の二面性、つまり、中米=属領での「既存体制」を維持するのに必要な援助を引出すための米国国内消費向けの理念「民主主義」と、前記の腐敗等を伴わねば成立しない現地の属領「民主主義」の使い分けに注意する必要があろう。しかもこの現地の「民主化」も、いまやまさに危機に瀕している帝国主義と寡頭支配勢力の歴史的な同盟体制の維持という枠組の中で許容されているものであり、その「民主化」—その枠内でも民衆の間での所得の再配分の願望や抑圧からの解放意識を強めざるを得ない—が、民衆的基盤を持った権力の樹立へと発展する可能性が出てきたとき、その「同盟体制」は再び軍部や独裁権力に協力を仰ぐことになろう。しかし、この「民主化」の現地での矛盾が増大し、さらに、米国の国内で「帝国の民主主義」が持つ二面的な欺瞞性についての啓発が進んでゆくとき、中米にとっての眞の民主主義の所在が明らかとなってくるであろう。

報告 2.

アンデス地域における民主化

辻 豊治（京都外国语大学）

アンデス地域における政治状況は、79年エクアドル、80年ペルー、82年ボリビアにおいて民政移管が実現され、コロンビアが58年以降、ベネズエラが59年以降、文民政権下にあるため、チリを除いてこの地域では全体として民主化（＝民政移管）が達成されたことになる。

これを60年代以降の政治動向のなかで概括してみると、60年代の改革主義、70年代の反動化あるいは軍政、80年代の民政移管と特徴づけられる。つまり、60年代のラテンアメリカは、キューバ革命の衝撃、経済の国際化状況のなかでブラジル型の開発戦略と「進歩のための同盟」路線に沿ったポピュリスト的な改革主義の二つのモデルが提示され、アンデス地域の選択は後者であった。この改革主義の限界性はペルー、ボリビア、エクアドルにおける左翼的な軍事政権およびチリにおける社会主義政権を生み出したが、これらは70年代後半には開放経済を標榜する軍事政権の力の前に敗北した。

80年代のラテンアメリカ経済は、世界不況のなかで開放経済がもつ脆弱性を露呈し、ほぼ例外なく累積債務、加速的インフレ、失業の増大といった危機に直面している。この時期における民主化は、経済危機による国内外からの圧力を前に軍部が政権を放棄した結果であり、この意味では経済危機の政治的表われとして捉えるべきであろう。この点、ベネズエラ、コロンビアの文民政権下の国においても政権交代が進行しており、この現象を「民主化」としてよりむしろ「変動」として捉える方がより適切であろう。

経済危機の真只中に成立した文民政権が、緊縮経済という枠をめられて、社会・経済的な民主化が達成されないとすればこの政治的民主化はむしろ新たな政治危機の幕開きとなる可能性がある。

報告 3.

ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイにおける軍政から民政への移管の過程

グスタボ・アンドラーデ（上智大学）

1970年代の後半からラ米諸国において民主

化の動きが目立ってきた。そのなかで注目を集めているのは、南米の南の国々である。これら3国は似た特徴をもっている故に、比較研究することで、この民主化への共通な点が見出せるかもしれない。また同時にそれぞれの特長も見出される。

ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイは軍政成立時に深刻な経済危機に悩まされていたから、軍部が政権をとる口実になった。しかしブラジルの21年間、アルゼンチンの7年間、ウルグアイの12年間の軍政権で、経済問題は解決されるどころか、現在は更に深刻な状態になっている。政治不安による都市のテロが盛んであったことから、治安を取り戻す目的で人権問題を起こし、全世界の批判を浴びることになった。ブラジルの場合は完全に政治活動を禁止することはなく、まがりなりにも議会が存続し、軍政権を支持する政党もあった。しかしアルゼンチン、ウルグアイの場合は軍部政権を支える運動も無かったので、強硬な政策をとらざるを得なかった。さらにアルゼンチンの場合は、マルビナス戦争のために一層軍部に対する国民の信頼は薄れてしまった。

この3国の例から、一つの結論が出される。それは、軍部が政権をとったときに掲げた目標は、治安を取り戻すこと以外何も実現されなかったために、国民の支持を完全に失ったということである。

○コメント

1) 門田 衛士（共同通信）

メキシコを拠点に今春まで3年半、中米諸国を取材した経験を基に感想を述べたい。

中米諸国の「民主化」が①自由な選挙、②人権の尊重、③民主的制度の確立を通じ同地域の抱える貧困など歴史的・社会的不均衡を是正するプロセスとみなすなら、80年代に実施された「民主化」の試みの結果に対しては極めて独断的だが、「NO」といわざるを得ない。なぜなら米国の支援で二度の選挙を実施したエルサルバドルの場合、同国の抱える問題は未解決のまま放置されているし、ニカラグアの場合も、昨年11月の大統領選は米国の非難をかわし、サンディニスタ政権を追認する“方便”として実施されたからだ。

中米諸国には各国固有の事情もあり、同列

に論じることは難しいが、同地域の「民主化」への動きがレーガン米政権の意向を反映している現実と、中米の「民主化」が米国の求める「安定化」と重複する部分が多い、との加茂氏の指摘はその通りだと考える。

2) 堀坂浩太郎（上智大学）

(1) 民主化が南米政治の新たな潮流になっているが、文民政権にとってジレンマはニュー・プロフェショナリズムといわれ、政治的な発言力を格段に付けてきた軍部の扱いにある。この点、比較的早い段階で民政復帰したペルーの経験は示唆するものが多い。

(2) ベラウンデ政権はその発足時から、軍部によるクーデター再発の危険性が取り沙汰されていた。そこで、同政権が採ったのは軍部との妥協策だったのではあるまいか。ベラウンデ政権下で兵力は9万5,000から13万5,000に拡大し、軍備費はGDP比4%から7%台に膨張した。この結果、国民1人当たりの兵力は軍事独裁のチリと並び、南米でも最も高い部類に属す。軍備が経済を圧迫し、同政権に対する国民の不満を醸成したともいえる。

(3) 敗戦の責任や人権問題を取り上げ軍政時代の大統領・政府首脳を法廷で裁き、軍事費削減、行政部門・国営企業から軍人支配の払拭に全力を上げるアルゼンチンのアルフォンシン政権の動向は、文民統制の大きいなる実験として評価されてしかるべきであろう。

3) 中川 文雄（筑波大学）

ラテンアメリカの中で民主化が国民の広汎な支持を得、国民感情を高揚させたところがあるとすれば、今日の南米南部がそれに最も妥当するであろう。アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジルでは自由な選挙にもとづいたリベラルなデモクラシーは、寡頭制支配と結びつきながらも19世紀以来の伝統であり、近年の軍人政権支配は、この伝統の中斷であった。国によって程度の差はあるものの、軍人政権下での抑圧ないしは恐怖から解放された喜び、また、次第に経済、政治両面での運営能力の低下と腐敗に陥った軍人政権終えんの喜びは南部諸国で最も大きかった。たゞ、民主化の過程が、アルゼンチン、ウルグアイで短期間に、かつ、軍人政権との継続性を否定する形で進んだのに比して、ブラジルの民主

化は10年の年月をかけ、かつ、軍人政権との継続性を保ちながら行なわれたのは対比的で、これには、それにおける政治文化の差違、また、軍人政権下での抑圧の度合の差違が影響している。これら3国で新たに発足した文民政権がどこまで持続し安定し得るかを考える時には、それぞれの国での過去の文民政権の崩壊の過程を詳細に吟味することが（もちろん、それ以後の社会変動を考慮しつつも）有意義であろう。

4. 学術・文化情報

デイヴィッド・A・ブレイディング博士講演会

ケンブリッジ大学ラテンアメリカ研究センター所長をつとめる同博士は、本年3月から5月にかけて2箇月間、学術振興会の短期招聘計画により滞日された。この間3月18日(月)国際文化会館において、「インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガの『皇統記』について」という題目で講演された。以下はこの講演の要約である。

ガルシラーソの「皇統記」は、オビエドに始まりゴマラを経てエレラに至る征服史叙述の伝統に対する意識的な反駁であり、同時にアコスタの原住民文化観に対する批判を含意すると見ることができる。この点は「皇統記」に先立って書かれたフロリダ征服史に顯著である。ここに現われる原住民像は、近くはエルシソ、遠くはタキトゥス（「アグリコラ」）に遡る筆法で、自由を愛する戦士として描かれ、無気力で怠惰なステレオタイプとは対照的である。「皇統記」の重要性は、人間の道徳的判断がすべてクリスト教の神の啓示に依存し、従って異教徒は原理的に文明を持ち得ず、持つとすればそれは悪魔の奸計の所産だとする考え方を打破しようとした点にある。当時イエズス会は中国で異教高文明に直面してこの考え方方が大いに揺らいでいたが、アコスタはその一面の近代性にかかわらずこの見解をとった。ガルシラーソがこの立場を脱する機縁になったのは、第一にロマン・イ・サモラを通じて伝えられたラス・カサスの「弁明史論」の考え方だった。異教徒であっても自然法を看取ることができ、それに基づいて正しい立法を行ってポリシー（この時代の

用語法では文明とほぼ同義)を構築することができるというのである。これを補強したのが、新プラトン主義の、神の知的能力に人間理性が参与することができるという考え方であり、この意味でガルシラーソの最初の著作がレオン・エブレオの「愛の対話」の翻訳であったことは重要である。続篇の「ペルー概史」は征服以降の歴史の年代記的叙述だが、この中にガルシラーソの政治的理想的が見てとれる。かれは征服を是認する。かれにおいてそれは、将来の偉大な総合をもたらすために必要な破壊であり、エウセビウスにおけるローマの征服のように、福音伝道の道を整えた点で評価される。その総合とは、言わば神聖インカ帝国とも名づけ得るものであって、征服者であるエンコメンデロたちと、インカ皇統を継ぐ原住民貴族とが、独立のクリスト教君主国において統一され、間に生まれた自分たちメスティーソがこれを継承することだった。この立場からして、かれは征服者たちに對してはゴマラに比べても点が甘いかわりに、副王トレドとフェリペ2世の帝国体制には厳しい。ビルカバンバを攻めてインカ皇統を斬ち、自分たちメスティーソを冷たく遇したためである。

(文責:高橋 均)

5. 近着会員業績

〔籍〕 Yasuo Wakatsuki & Iyo Kunimoto eds.『La Inmigración Japonesa en Bolivia—Estudios Históricos y Socio-Económicos—』(Universidad de Chuo 1985)

〔抜〕 石井陽一 スペインおよびメキシコにおける農地改革法の歴史的変遷『法社会学』第37号(日本法社会学会 1985.3)

〔抜〕 吾郷健二 経済危機下のラテンアメリカ『西南学院大学経済学論集』第19巻第4号(西南学院大学 1985.3)

〔抜〕 真鍋周三訳 クスコにおけるトゥパック・アマル反乱軍の社会的組織 1780-1781 レオン・G・キャンベル『史友』第17号(青山学院大学史学会 1985.3)

〔籍〕 ウンベルト・テツヤ・ヤマキ 移民都市における定住空間構造の内因分析に関する研究(大阪大学工学部 1984.1)

〔籍〕 Etuko Kuroda Under Mr. Zempoa-

Itépetl—Highland Mixe Society and Ritual』Senri Ethnological Studies』No. 12 (National Museum of Ethnology 1984)

〔冊〕『メキシコ研究センター通信』No.5 (京都外国语大学メキシコ研究センター、1984.4)

〔誌〕山崎春成・中岡哲郎 対談・メキシコ市—この「究極都市」『市政研究』66号(大阪市政調査会 1985)

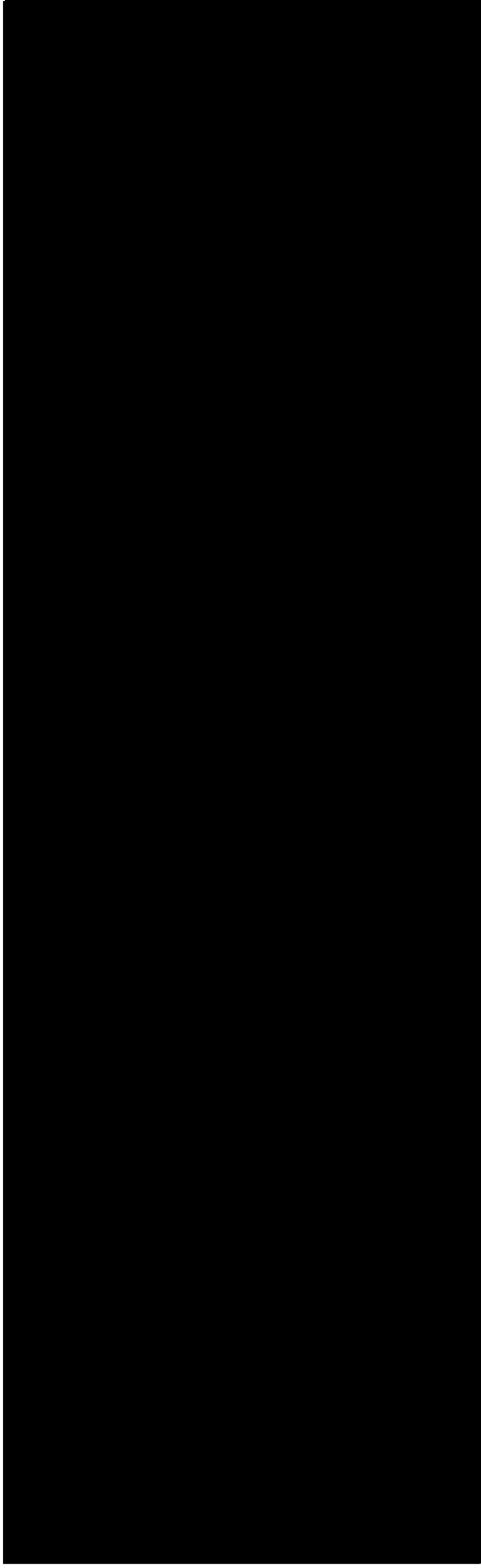
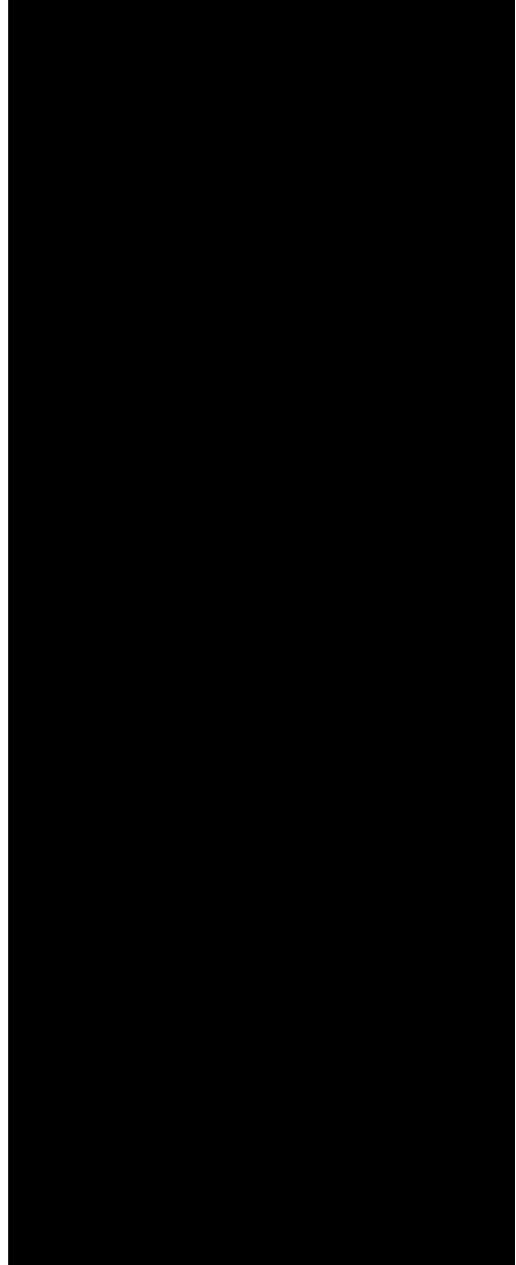
〔抜〕高林則明 ミゲル・アンヘル・アストゥリアスと『トウモロコシの人々』の小説世界『研究論叢』xxv(京都外国语大学 1985.3)

(抄録)表現形式としての《日常的—神話的》現実の概念を理論面と作品叙述面の双方から考察。同一かつ弁別される作品内現実の二側面を貫ぬく日常的論理と神話的論理を抽出し、作品では後者が前者を包摂していることを示した。

6. 事務局から

i) 新入会員



- 
- 
- iii) 会費振込先
 - 郵便局振替口座 東京1-13630
(日本ラテンアメリカ学会名義)
 - 三菱銀行成城支店普通預金口座
4616294 (日本ラテンアメリカ学会
代表中川和彦名義)

7. 年報6号論文等の募集

年報6号に掲載するための論文等を下記の要領で募ります。投稿を希望される方は、種別（論文・研究ノート・書評の別）、題目、分野、用語（日本語・英語・西語・ボルグ等）、予定枚数、氏名を、9月30日までに書面にて事務局までお知らせください。締切は12月15日とし、約1か月で審査を行ない、その結果を御通知いたします。審査を通過したものも、審査委員の見解を伝えて修正・書直しをお願いすることがありますので御承知ください。

- なお原稿は未発表のものにかぎります。
- 主 題： 学問分野を問わずラテンアメリカに関連するもの。
 - 用 紙： 和文 1行20字詰横書原稿用紙(200字・400字、ただしB5判400字詰は不可)
欧文 市販タイプ用紙
 - 枚 数： 和文 論 文 60枚
研究ノート 30枚
書 評 20枚
欧文 論 文 10,000語
研究ノート 5,000語
書 評 3,500語
- 注 語(words) とは、タイプライターのマージン幅タッチ数に行数を乗じ、これを定数6で割った値を指します。
- 原稿は上下左右のマージンをゆっ

たり取り、必ずダブル・スペースで打って、審査委員がコメントを書きこみやすいようにしてください。

ダブル・スペースは、機械の行送りを「3」にあわせてので、「2」ではハーフ・スペースになりますから御注意ください。

○和文の場合、300語以内の欧文要約を添付すること。打ちかたは上と同じ。

○編集委員

中川 和彦
石井 章
松下 洋
原田 金一郎
恒川 恵一
野谷 文昭

連絡先 事務局

審査委員 原稿到着後に開かれる編集委員会にて決定。原稿1本につき1名ないし数名。氏名は公表しない。

○図 版： 図版トレースは、執筆者に御作成いただくか、そうでなければ実費を申し受けます。初稿段階ではスケッチで構いません。写真の場合も、スライド紙焼き代等は執筆者負担で願います。

No.19 1985年8月1日発行
▼157 東京都世田谷区成城
6-1-20
成城大学法学部中川研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎03-482-1181